タニノ クロウ

独特の舞台芸術に世界が注目する 気鋭の演劇アーティスト。

庭劇団ペニノ代表　劇作家・演出家
KurouTanino

同じ人間を相手に
心理や精神世界に向き合う仕事なので、よく似ている。

●Profile
タニノ クロウ

1976年富山生まれ。昭和大学医学部卒。在学中の2000年、演劇部のメンバーと「庭劇団ペニノ」を旗揚げ。02年、卒業後は非常勤の精神科医と並行して演劇活動を行う。10年よりセゾン文化財団フェローとなり、11年からは演劇に専念。「笑顔の砦」（07年）と「星影のJr.」（08年）の2作品が2年連続で岸田國士戯曲賞にノミネート。「苛々する大人の絵本」（09年）でドイツの演劇祭に参加。以来、スイス、オランダなど海外での公演を積極的に続けている。

精神科医
劇作家/演出家

演劇「大きなトランクの中の箱」　◎撮影田中亜紀

偶然だった演劇との出会い

精神科医の経歴を持つ異色の演劇アーティスト、タニノクロウ。「庭劇団ペニノ」を率いる彼は、いま海外の演劇人たちから注目の存在だ。舞台芸術にこだわった独特の演出が評価され、ドイツをはじめ、スイス、オランダ、北米など、欧米の演劇シーンに数多く登場する。

「たまたま演劇に出会っちゃったんですよね」

きっかけは大学生のとき。昭和大学では1年次は富士吉田キャンパスで全寮生活を送るが、寮のクリスマスイベントでタニノは同級生と劇を初めて創作し、演じた。

「突然、『一緒にやらないか』と声をかけられて。多分、登場する工事現場の人の役にハマったんでしょう（笑）。当時から髭も生やしていましたし」

人前に出て何かをやるなんて想像もしなかったと言うが、終わった後、味わったこともない高揚感があった。このままでは終わらせるのはもったいないと、それまで休部状態だった大学の演劇部を仲間と復活させ、演劇を続けることに。最初は役者として舞台に上がったが、次第に自分でも創ってみたいという思いに駆られ、3年生のときに有志と「庭劇団ペニノ」を旗揚げした。

「小さい頃から絵を描いていたので、何か表現するのが好きで、そうした世界に一種の憧れのようなものがあったんでしょうね」

のめり込んだ絵画の世界の先に

生まれは富山市。実家は代々続く精神科医院で両親はともに精神科医。築百年以上の古い日本家屋の敷地には、坪庭に茶室、書道部屋、弓の稽古場もあった。広い独特の空間で小さい頃からタニノは、本棚にずらっと並んだ精神科の本を手に取ってみたり、絵を描いたりしていた。特に絵画は画家をめざすほど、のめり込んだ。

思春期を迎えた中学時代は両親と反りが合わず、問題を起こすことも。

高校は実家を離れ、千葉の全寮制の男子校に進んだ。

「母親が心配して寮のある高校を見つけてきて。でも男子校ですからね、寮では毎日、どこかで喧嘩が起きる（笑）」

そんなサバイバルな高校時代。勉強に勤しむ傍ら、絵画の世界にますますのめり込んでいった。恩師が理解を示してくれ、よく絵の話をした。

「その先生も寮に住んでいたので、よく部屋に遊びに行っていましたね。進路を決めるとき、『芸術を続けるにしても、これからは何か手に職を持っていたほうがいい』と強く諭されて」

ときはバブル崩壊後の就職氷河期。文系だったタニノだが、精神科医の母の影響もあって、医学部受験を決めた。

そして、昭和大学医学部に入学。演劇に出会うことになる。

「高校時代は本気で画家をめざしていましたからね。いろいろ描きましたよ。大きなキャンバスに緻密に描き込んでいくと